

琉球大航海の尖閣航路 ——西表島から飛鳥時代に遡る

はじめに

- 1 八重山の歴史は西北隅の祖納半島から始まった
- 2 西表島祖納村の鍛冶術の起源
- 3 祖納半島の地勢と尖閣航路
- 4 琉球大航海時代、首里那覇よりも大きな貿易勢力
- 5 那覇の聖母マリア、聖人モーゼ、天照大神
- 6 古那覇港に臨む小禄城と尖閣航路
- 7 隋書流求傳に尖閣の和語久場島あり

をはりに



いしんのぞむ
(長崎純心大学准教授)

はじめに

尖閣諸島は近代以前にも悠久の歴史があり、琉球船および朱印船が尖閣を航路の指標として、チャイナ船中でも琉球人が導航した。チャイナ人が尖閣を航路の指標とした記録は一度も無い。石垣島内では15世紀に貿易の重心が尖閣福州航路から波照間南洋航路へ遷移し、西暦1708(以下、4桁は全て西暦)年の『指南廣義』の尖閣航路は遷移以前の西暦14世紀(以下、世紀は全て西暦)に既に存在したと考へられる¹。

本稿で論すべきは、西表島中でも特に西北部の祖納(そない)半島であり、半島の中でも14世紀の北側から15世紀の南側に勢力が遷り、波照間勢力の興起に繋がる。波照間貿易路は呂宋に通じたと考へられるが、久米唐人村および福州の史料中にはほとんど痕跡が見られない。同じ15世紀には沖縄本島でも首里那覇と異なる勢力が中部の座喜味、越來、

中城、勝連で隆盛し、久米村唐人の必ずしも介在しない大貿易があった。

立論の鍵となる人物としては泰期、懷機(尚泰久)、護佐丸、阿麻和利、慶田城用緒などがあり、地名としては小禄、渡地村、雞籠(基隆)、久場島、越來、勝連、波照間など、文化では硫黄、長虹堤、ローマ貨幣、嚴島神社、イスラム教などを視界に入れ、薩摩進出以前の古琉球史の中に尖閣航路を位置づける。本稿の主要論旨は後半に在る。なほ、15世紀『海東諸國紀』に見える具足城がグスクの始見であるため、語源如何を問はず、本稿では主に具足城に従ふ。

1 八重山の歴史は西北隅の祖納半島から始まった

本篇は前作「鎌倉時代の尖閣航路から室町時代の波照間南洋大交易へ」(以下、前作と呼ぶ)²以後に『八重山日報』談話連載「小チャイナと大世界」などで分散的に論じた趣旨をさらに展開する。前作では石垣島と波照間島とを中心に述べ、西表島の祖納半島については簡略であったため、まづこれを補ひたい。

祖納村の大竹(おはたけ)祖納堂儀佐は、18世紀の琉球最主要地誌『琉球國由來記』に「ヲハタケ根所」として見える³。祖納堂が與那國島を遠望發見し、西征討伐したことが主に述べられてゐる。これにより知れるのは祖納堂は東から移住して來たのであり、流罪の落武者の類に擬すべきである。根所(ねどころ)とは氏の長者の家、乃至その氏神であるから⁴、要するに大竹祖納堂は祖納村の開祖である。ほぼ同文は「八重山島由來記」にも見えること前作に注したが⁵、他にも『琉球國舊記』及び『遺老説傳』に見えて⁶、諸本の文面を山里純一が比較してゐる⁷。

2 いしんのぞむ「鎌倉時代の尖閣航路から室町時代の波照間南洋大交易へ」、『島嶼研究ジャーナル』13(2)、令和6(2024)年。

3 『琉球國由來記』巻21「各處祭祀・ヲハタケ根所」、伊波普猷等編『琉球史料叢書 第二』p.609、名取書店、昭和15(1940)年。

4 伊波普猷「沖縄縣下のヤドリ」に、根所を「氏の長者の家」とする。『琉球古今記』p.418、刀江書院、昭和2(1927)年。

5 「八重山島由來記」(全寫)、岩崎卓爾採録、『岩崎卓爾一卷全集』、107ページ、昭和49(1974)年、傳統と現代社刊。

6 『琉球國舊記』巻9「八重山記・遠波嵩根所」條、伊波普猷等編『琉球史料叢書 第三』、p.163、名取書店、昭和17(1942)年。『遺老説傳』巻2、琉球大學伊波普猷文庫藏寫本、IH013およびIH014、第20葉。

7 山里純一「フクロウに滅ぼされた村」、宮城學院女子大學キリスト教文化研究所『沖縄研究ノート』31、令和4(2022)年3月。

1 『指南廣義』の詳細は、いしんのぞむ「和訓摘録指南廣義」、長崎純心大學『教職課程センター紀要』7、令和5(2023)年。

祖納の大竹御嶽附近では大濱永亘が昭和60(1985)年に多数の鐵滓(てっし)を見出し、平成元(1989)年と翌年に調査が行なわれた。その間の経過については、調査報告書附録の石垣金星「文献からみた祖納の歴史」に詳しい⁸。同じく附録の大澤正己「西表・上村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」によれば、14世紀中期に始まる鐵(略字鉄)の鍛造剥片と、16世紀以後の鐵鍋が出土し、鐵鍋は大陸産の成分に似てゐるといふ⁹。上村とは祖納半島西半の微高地であるが、この時は主に上村の北半の大竹遺跡を中心に調査が行なわれた。報告書を通覧すれば、祖納の大竹遺跡の福建白磁など出土物も基本的に14世紀半ばから始まる。16世紀以後の鐵鍋は14世紀祖納半島の鍛冶術が大陸起源だといふ根拠にはならない。

鍛鐵遺物出土により石垣金星は大竹祖納堂が鍛冶屋であったと推測し、定説となつてゐる。しかし上引の由來記の類でも、石垣金星による聴き取り調査でも、大竹が鍛冶屋であったとの説話は全く見えない。鍛冶説話が全く無いことは見過ごすべきではないだらう。

後に平成9(1997)年の慶來慶田城遺跡調査報告書によれば、半島の上村南半の慶田城遺跡附近で極めて稀少ながら13世紀末の白磁が出土してゐる。報告書は慶田城氏の居住により遺物が除去されて減ってしまったと推測する¹⁰。しかし前作で述べた通り、遺跡の総合的年代は半島北半が早く南半が晩い。南半で居住者が清掃などして13世紀遺物が減ったとすれば、北半では多く出土するはずである。疑ふらく13世紀末は入殖の初めであり、もともと白磁の量が少なかったのではないか。北半で再度調査すれば13世紀末の白磁片が少しは出土するかも知れない。上引の上村遺跡調査報告書では、遺跡年代は今のところ14世紀中頃までしか遡れないが、將來の調査によっては更に遡り得ると述べる¹¹。

13世紀末は元寇から間もない年代であり、博多寧波航路が鎖された

8 石垣金星「文献からみた祖納の歴史—上村遺跡を中心として—」、沖縄縣教育委員會『西表島上村遺跡、重要遺跡確認調査報告』附録、p.196至p.202、平成3(1991)年。

9 大澤正己「西表・上村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」、前掲上村遺跡報告書附録(註8)、p.174至181。

10 沖縄縣教育委員會『西表島慶來慶田城遺跡、重要遺跡確認調査』p.33至34「白磁」、平成9(1997)年。

11 前掲上村遺跡報告書(註8)、p.172「調査の成果と今後の課題」。

ため、琉球福建航路の需要が高まり始めたことは前作で述べた。その時代に何びとか祖納へ入殖し、稀少ながら白磁を今に留めてゐる。かりに13世紀末の入殖者が大竹祖納堂であり、孫世代の14世紀中期に鍛冶を始めたとすれば、大竹祖納堂の鍛冶遺聞が存在しない所以を解することができる。

『慶來慶田城由來記』は15世紀後半の慶田城用緒を始祖として、それ以前の大竹祖納堂の遺聞を記載しない¹²。慶田城の家史であるから、用緒が平久保加那按司を討ち果たし、長田大主と義兄弟となった英雄説話は記載されるが、大竹祖納堂については記載するほどの大事が無かったと考へられる。

前作で述べた通り、宮古八重山諸島で出土する福建の白磁は14世紀前半に多く、14世紀後半から減少してをり、15世紀慶田城の入殖時に尖閣福州貿易はすでに最盛期を過ぎてゐた。疑ふらく大竹はすでに勢力強盛ではなかったため、用緒は南半の空き地に入殖する際に武力で挑む必要が無く、記載するほどの遺聞は産まれなかったのであらう。前作の赤蜂と長田大主が波照間から石垣島南部に入殖する際に戦闘が無かった事情と似てゐる。大竹側にとっては慶田城が南洋貿易の富をもたせれば不都合は無かったかも知れない。

一方、『琉球國由來記』および『八重山島由來記』、『琉球國舊記』、『遺老説傳』には逆に大竹祖納堂の遺聞のみ記載され、前作の慶田城用緒および平久保加那按司の遺聞が記載されない。琉球八重山の通史に於いて慶田城の位置づけは大きくなかったのである。大竹は始祖として根所に祭られ、祭祀上で一定の位置を占めてゐる。上引の石垣金星も大竹のナンバーワンの地位は不動としてゐる。

『慶來慶田城由來記』によれば、慶田城用緒の孫用尊は別名祖納當である。池間榮三『与那国の歴史』は16世紀の慶田城祖納當と大竹祖納堂とを同一人として、年代が齟齬することに疑義を呈してゐる。主な疑義は1477年に朝鮮人が與那國に漂着した際、平和裏に西表島の祖納を経由して那覇から朝鮮へ送還されてゐるため、16世紀にやっと祖納當

12 石垣市役所『石垣市史叢書』1、「慶來慶田城由來記」、平成3(1991)年活字印本。

が與那國を發見する筈が無いのである¹³。しかし後に上述の祖納半島調査により、出土遺物は14世紀中葉乃至13世紀末まで遡ることが判明し、よって大竹祖納堂の年代を16世紀でなく14世紀中葉まで遡れば、慶田城祖納當とは別人となり矛盾しない。池間の疑義は正しかった。

2 西表島祖納村の鍛冶術の起源

西表島の歴史は祖納半島から始まる。半島北半が大竹の遺跡、南半が慶田城の遺跡であり、慶田城は15世紀後半に西表島の覇者であった。それ以前に大竹か何びとか、わざわざ西表島に入殖し、しかもわざわざ西北隅の祖納半島に入殖したのは、大陸との貿易を目的としたであらう。上述の福建白磁がそれを示してゐる。

上引の大澤正己報告は大陸産の鑄鐵品の輸入を想定し、揚子江流域の鐵礦山を候補とした¹⁴。また台湾島北部には淡水海岸の砂鐵があり、淡水の十三行遺跡では飛鳥時代までに製鐵が行なはれたことが知られる¹⁵。淡水は西表島から遠くない。しかし琉球諸島は鐵を産しないので、原料鐵の産地と鍛冶術の起源とは別に扱ふ必要がある。

14世紀中葉、察度王が内地から琉球に鐵を導入したことは著名であるが、沖縄本島で最古の鐵器は約2,000年前、彌生時代の鐵斧が中部の具志川市(現うるま市)の宇堅貝塚から出土してゐる¹⁶。大澤正己の研究でも我謝(沖縄本島西原)の出土鐵滓は13世紀である¹⁷。比較すれば14世紀中葉の祖納半島の鍛冶遺物はさほど早期ではないので、鍛冶術は東から到達した可能性が高い。

宮古學の大家稻村賢敷は多良間島で「鍛冶神(かづがむ)のにーり」および附隨説話を筆録してゐる。「にーり」とは神歌である。それによれば内地から宮古に渡來した鍛冶神は鍛冶術を沖縄諸島に教へひろめ、

13 池間榮三『与那国の歴史』、p.52至58、昭和47(1972)年再版、池間苗子および琉球新報社刊。これより先に池間榮三、新里和盛共著『與那國島誌』(昭和32年、池間榮三自刊)および『与那国の歴史』(昭和34年、池間苗子刊)があるが今未閲。

14 大澤正己、前掲論文(註9)、p.178至181。

15 陳光祖「十三行考古遺址搶救發掘資料新期整理研究工作述略」、新北市立十三行博物館『遺址十三』創刊號、令和4(2022)年、p.30至37。

16 具志川市教育委員會『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚發掘調査報告』p.13、昭和55(1980)年。

17 大城慧「我謝遺跡出土の鉄関連資料について」、『西原町史』5(資料編4)所收、平成8(1996)年西原町刊。

凶暴で怖れられたが、與那國まで渡って殺されたため、鍛冶術はそれより西へひろまらなかったといふ¹⁸。この神歌と説話によれば、沖縄諸島の鍛冶の祖は倭寇的な内地人であって、祖納半島の14世紀鍛冶遺跡も大陸から渡來したとは考へにくい。鍛冶術が大陸からもたらされた説話は無い。

『八重山島由來記』に、石垣島大濱の「ヒルマクイ」(廣間杭か)と「コウチタマカネ」(幸地玉金か)といふ兄弟が鐵製農具を求めて薩摩の坊津に渡った説話が見える¹⁹。鐵器を薩摩に求め、西の祖納半島乃至福建に求めなかったことは、「鍛冶神のにーり」と相印證して、鐵が東から來たことを暗示する。

琉球諸島の文化や言語は與那國が最西端であって、台湾島との間には大きな斷層がある。これら鐵器と鍛冶の説話も同じ域内に在り、與那國島まで日本の内であったことを示す痕跡の一斑であらう。もちろん14世紀中葉の祖納半島に福建の白磁が輸入されてゐた以上、鐵原料も淡水や福建から輸入された可能性は否定できないが、鍛冶術も同じく西から輸入されたとは判じ得ない。祖納半島から尖閣福建方面に渡る航路が存在した遺證は福建白磁だけでも有力であり、必ずしも鐵滓に依頼しない。

3 祖納半島の地勢と尖閣航路

令和7(2025)年1月、筆者は祖納半島現地を探訪し、些かの知見を得ることができた。まづ半島南岸に突き出るフチコ(口子)は慶田城用緒が貿易のため標識旗を立てた地として前作で論じたので、これを最重要と考へ現地到達を試みた。しかし小徑も道標も無く、東西北側を繰り返し巡ったものの樹林に阻まれて到達できなかった。フチコの東側海岸のインガー(井の川)には峻嶮ながら到達したが、そこから西へ崖下を攀ち進むことは不可能であった。

半島東南の前泊の入り江(所謂祖納ビーチ)からは海水を隔てて約250メートル西方にフチコを望むことができる。フチコはまた「フチコ崎」

18 稻村賢敷『宮古島庶民史』、昭和32(1957)年、著者自刊。p.52至54。

19 『八重山島由來記』、崎原御嶽の條。前掲書(註5)。